

N・ルーマンの反省理論と科学システム 機能システムの内部構造論に向けて

筑波大学 川山竜二

1 目的

本報告の目的は、ニクラス・ルーマンの社会システム理論における反省理論と科学システムの関係を考察することである。

2 方法

本報告では、(機能システムの) 反省理論と(機能システムとしての) 科学システムにはひとつのねじれが存在していることを指摘する。この課題設定から、機能システムの内部構造論という新たな社会システム論の問題を提示する。本報告では、教育システムと教育学、法システムと法学、宗教システムと神学を具体事例として取り上げたい。

3 結果

ルーマンの社会理論は、近代社会を機能ごとに分化しているとみなし、それぞれ自律したシステムを構成していると提示した。それぞれの機能分化システムは自律性が備わっており、自らのシステムを自己組織化している。くわえてこれらの機能システムには、「反省理論」が含まれている——たとえば、経済であれば経済学、法であれば法(解釈)学というように。

以上のように捉えた場合、機能システムの反省理論と科学システムにはひとつのねじれが存在する。つまり反省理論は機能システムに内在しているのだから、それぞれの機能システムに帰属する作動である。例えば、法学であれば法システムの作動であり、経済学であれば経済システムの作動であり、教育学は教育システムの作動である。ところが、法学、経済学や教育学は科学システムにおいては専門分野であると見なされる。このことを字義通りに解釈すれば、法学や経済学は法システムや経済システムの反省理論というそれぞれの機能システムの作動であり、かつ科学システムの作動であるということになる。

4 結論

反省理論と科学の専門分野はどのように位置づけられるのだろうか。それぞれの機能システムの反省理論が科学の専門分野の形成に影響を及ぼしているのであれば、科学システムが他の機能システムの影響を受けることになりはしないだろうか。それは科学システムの自律性を脅かすことにならないのだろうか。こうした問いに答えるために、機能システムがどのようにして成立しているのかを探究する必要があるだろう。

文献

Luhmann, N., 1990, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag. =2009, 徳安彰訳『社会の科学 (1) (2)』法政大学出版局。

Luhmann, N. & Schorr, K.E., 1988, *Reflexionsprobleme im Erziehungssystem*, Suhrkamp.

Teubner, G., 1989, *Recht als autopoietisches System*, Frankfurt am Main : Suhrkamp Verlag. =1994, 土方透・野崎和義訳『オートポイエーシス・システムとしての法』未来社。